

花卉を追いかけている最中に目の前が光り、気が付くと辺り一面真っ白なセカイが広がった。

「ここは……どこだろう……」

「何も無いね……どうしよう……」

「そうだな、本当に何も無いか探してみるとしよう」

そう言うと彼女からの視線を感じる。

「うん、そうだね……青柳くん本当に体調大丈夫？」

「ああ、問題ない。心配かけたな」

「ううん、大丈夫なら良いんだけど……」

周りを歩き見渡しながら進むと2人の中に気まずさは皆無の、なんなら少し暖かい静寂が辺りを包み込む。

彼女の方を見るも不思議そうな顔をしており、ふと出会った頃を思い出す。

——WEEKEND GARRAGEにて髪も長く眼鏡をかけていて自分に自信がなかった頃の彼女の事。

——初めてのイベントでのアクシデントで歌えなくなってしまい泣いていた彼女の事。

——もう逃げないと覚悟を決め髪も切りコンタクトにした強い彼女の事。

——俺が自分の気持ちから逃げた時にわざわざ他校にまできて「どうしたい？」と問いかけてくれた彼女の事。

——自分の気持ちと向き合い初めて4人で歌った時の楽しそうな彼女の事。

振り替えるとキリがないくらい彼女でいっぱい、山貫ってきたのだと改めて感じさせられる。

「ふふっ、何か出会った頃の青柳くんを思い出すな」
「?!」

自分も先程考えてた事が当の本人に聴こえてたのか、それとも偶然なのか分からずただ同じ事を考えていたのかとビックリする自分の思い等知らないまま彼女は続ける。

「最初は怖そうだなって思ってたのに今は沢山笑ってくれるようになったり……前のフォトコンテストみたいに……」

そう言い終わるや否や何も無い空間から写真が浮かび上がった。

それを2人で覗き込んでみるとそれは先程小豆沢が話していたフォトコンテストで撮った写真だった。

「これは、この前の……」

「どうして、ここにこれが？」

「あ！ 分かったかも……でも確証はまだないから少

し私に付き合ってくれないかな？」

「ああ、わかった」

「ありがとう！ この前もお話したけど私実は一緒にテストの勉強会出来たこと凄く嬉しかったの……私1人だけ学校が違うから同じ出来事を共有出来ないことが少し悲しくなったりしたんだけど、その時は私も同じ学校に行ってる気分になれるから」

「俺もだ。一緒に勉強していると普段見れない姿が見えるのがとても心地よく感じたりするな。勉強だけでなく同じ本を読み感想等を語り合えるのも凄く好きだ」

すると空間から机と勉強道具、そして本が現れた。

「やっぱり！ 青柳くん！ さっきまで青柳くんの想いで出来たセカイ、私の想いで出来たセカイなのだとしたら、ここは私達2人の想いで出来たセカイなんじゃないかな……」

「俺もそう思った。何も無いセカイは出会ったばかりの俺たち、そして思い出を紡ぐ事で俺たちだけのセカイが出来上がっていくのではないかと思う」

ここまでくるとほぼ確信を得たと感じる。

そして2人で沢山思い出を語り合った。

一緒に初めて歌った時の事。

初めての誕生日。

初詣に行ったこと、羽根つきして遊んだこと、結婚式でエキストラのバイトをしたこと、UFOキャッチャーやゲームセンターで遊んだこと、挫折を味わい乗り越えて自信を持てるようになったこと、皆でキャンプに行ったこと、伝説の夜を見たこと、初のイベントを主催したこと、初めて曲を作ったこと。

お互いの文化祭に行ったときの事、お付き合いを始

めた時の事、2人で初めて経験した沢山の事。

それに伴い写真、勉強道具等があった空間がどんどん色付けられ物も溢れていく。

マイク、カメラ、羽子板と羽根、お互いの誕生日にあげたプレゼント、UFOキャッチャーの景品、テント、わたあめ器や狼の被り物、更には白いはずの場所が桃色と青色、間には紫や紺などカラフルになった。

「今まで沢山の事があったね……」

「ああ、でもこれからも沢山の事が経験できるだろう」
「青柳くん、このセカイとても暖かくて凄く幸せな感じがする」

「そうだな……とても言葉では表せられないほどに愛おしく落ち着く」

すると、ひらり、と先程追いかけてたはずの花弁が

舞い降り2人を導くように舞った。それと同時に、どこからともなく追い風が吹く。

「まだ続くみたいだな」

「うん！ 今度はどんなセカイにいけるんだろう！」

「不安は無くなったか？」

「青柳くんもいるし、凄く幸せな旅だって気づいたから、もう大丈夫！ 私達の元のセカイを目指しながら進んで行こう？ 青柳くん！」

「ああ、とても楽しみだ……この手を離すなよ小豆沢」

そしてまた幸せそうに微笑むこはねと冬弥を、光が暖かく包み込む。この先も2人なら大丈夫だとお互いに固く手を握りながら次のストーリーに心弾ませて。